

# 西洋じぎょ旅行

橋 本 綾 子

一九八四年四月、在外研究員としてブラッセルに下りたつた私は、そこに一月を過ぎ、アントワープ、ゲント、ナミュール、ブリュージュ等の小都市を廻ってオランダ、アムステルダムに着き、その周辺の町を旅しながら五月二日、夜行列車でミュンヘンに着いた。そこで二ヶ月間のドイツ語講習を受けたのだが、その目的は、ドイツ語に馴れることもあるが、半分は学生寮に入ってせめて二ヶ月間宿を探す苦勞から解放されることと、各国の学生に接し、この地の美術、博物館を見て廻り、ここを足場にドイツ中部を旅するためであった。毎日授業が終ると地図を手にして、私は一人で美術館を廻り歩き、週末は宿題をもって飛ぶように二泊三日の旅に出た。レーゲンスブルグからニュールンベルグへ。ヴュルツブルグからカツセルへ。時には一週間すつかり授業を休んでフランクフルトからマンハイム、ハイデルベルグまで足を伸ばし、大学の研究室へ、レダローゼ教授を訪ねたりした。夜はミュンヘン国立劇場でオペラやバレエを見、「アイーダ」や「白鳥の湖」の格調の高さに呆然としたり、劇場の観客

を含む古典的雰囲気、さすがヨーロッパ、と文化の底の深さを思い知ったりした。それにレーンバッハ美術館で見るドイツ表現主義の絵画は、周知の作品でもそれを発祥の地で見ると、思いもよらない鮮やかさで迫ってくるのを思い知ったのである。

こうして私はミュンヘンの生活の後、プラハに三日、ウィーンに十日間、東・西ベルリンに二週間、そして革命記念日の翌日パリ日本館に入って二ヶ月を過ごした。そしてロンドンに半月、スペインのマドリッドに一週間、そこからアンダルシア地方を廻ってバルセロナに五日、そして十月の下旬、落葉の散りしくミラノに入り、イタリヤ半島をヴェネチア、フィレンツェ、ローマへと途中の山岳都市を廻り乍ら南下して、ヴァティカン市の聖ピエトロ寺院でクリスマスを迎えたのであった。正月はエジプトのカイロ、ルクソール、アスワン、アプシンベル神殿を訪ねて過し、再びパリに帰ったときには、ヨーロッパは大寒波のさ中で、凍りついたチュイルリ公園の噴水を見乍ら国立図書館の東洋写本部に通って、日本から渡った江戸時代の絵本類を調査し

た。そうして寒さの緩んだ一月の末、ギリシャのアテネに向い、そこで十日を過し、トルコのイスタンブールを最後にシンガポールを経由して帰国したのである。

この長い初めてのヨーロッパ一人旅を終えて今振り返ってみると、よくも無事で、未知の国々を踏破できたものと不思議な気がする。各地で求めるミシュランのガイドブックとトマス・クックの時刻表が唯一の頼りで、一つの国を去るときは疲れ果てているのだが、新しい国に入るとまた元気が湧いてくる。そうしていつしか十三ヶ国を廻り終えたとき、そこにはずしりとした濃密な体験が残され、それは日を経るに従って輝やきを増してくるのである。

私の専門分野は日本の近世絵画史である。これまでは琳派や円山四条派の作品の中に、日本の美意識を探ろうとしていた。そのためには作品の収集や落款、様式の検討も必要であるが、同時にそれを形成した江戸時代の社会や思想がどのように関わっているか実証的に示したいと考えていた。また方法的にそれらをどこまで関わらせるかも問題である。近頃は日暮れて道遠し

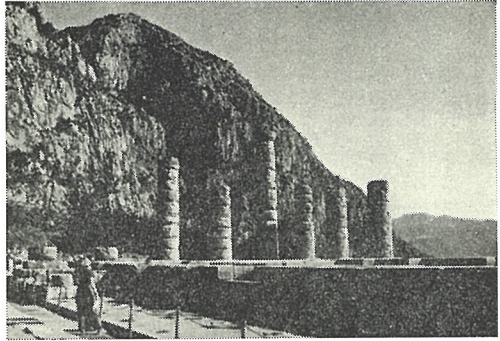
の感が深く、私は内地研修を願い、国内を歩いて今までの研究をまとめたいと望んでいたのである。ところがこれを聞かれた恩師の源豊宗先生は、今や九十一歳を越えて猶且つ一線で健筆を振っていられるが、「日本の研究はいつでもできる。ヨーロッパへゆき給え」と強く勧められた。東洋に関心をもつ私は韓国や中国には二、三度訪問してその雰囲気にも馴染んでいたが、ヨーロッパにはその機会がなかった。グローバルな視野で日本を捉えよ、という先生の言葉が私を翻意させ、遂に内地研修の願いを在外研究にきり替え、許されて広く西欧を廻ることになったのである。言葉も不自由、地理も不案内、体力も情報も不足している。私にあるものは長年日本を見てきた目と、女性として母親と妻と研究者を辛うじて持続してきたささやかな体験のみである。従って今この



オランダ・デルフトの中国の影響を受けたタイル

旅行記を書き得るのも、残念ながらその範囲内の素人のほんの感想の域を出ないのである。

初めてのヨーロッパは思いのほか生き易い社会であった。まず第一に、何と云っても日本の大学や職場において長年私を苦しめてきた露骨な女性蔑視がない。これは何とも晴ればれとする境地であった。ヨーロッパの女性でも、職場において男性と全く同等の権利を得ているとは思えない。しかし少くとも一般社会において、男女は互に異質性を認めた上で暖かく協力して生きているように思われた。特にドイツにおいて、男性は女性を庇う側に立ち、男の子は



ギリシャ、デルフォイのアポロン神殿

小さい頃からそのように躰けられていた。恐らく年配の私がたった一人で重い荷物を引きずってヨーロッパを歩くなど想像を絶することなのであろう。私は至る所で様々な人々の親切に助けられた。荷物が重くてステップの高いヨーロッパの列車に上らないでいると、駆けよって押し上げてくれたり、レーゲンスブルグの山中で日曜日はバスが来ないことを知らずに待っていると、

通りがかりの婦人が麓まで一緒に歩いてくれた上に、駅までゆく自家用車を見つけてくれたりした。それはドイツばかりではなかった。バルセロナでは、聖堂の帰路暗闇の袋小路に迷いこんだ私を、通りすがりの貧しい老婆が同伴の足の悪いお爺さんを一人で帰らせ、私の腕を掴んでドームの正面まで連れ戻してくれたのである。このような経験は至る所にあった。少くとも私の接した極く一般の社会は、経済大国の日本と比較にならぬつましさと暖かさで息づいていたのである。それは丁度ヨーロッパの果物や野菜が、形が悪く虫喰いも多いが、形の揃った日本のハウス野菜に比べて遙かに豊かな自然の味わいがあるのと似ている。私は新しい町にゆく度にお惣菜屋さんを見つけて土地の食事を楽しんだ。そうした生活の中で見た彼等の暮らしは、堅実につつましく、分に応じた生活の中で人間を大切に生きているように思われた。戦後凡ゆる面で急変し、その事によって経済的に復興した日本に比べ、彼等は寧ろ長年営々と築いた文化や伝統を重んじ、旧い秩序を持続しようと望んでいるように見える。小さ

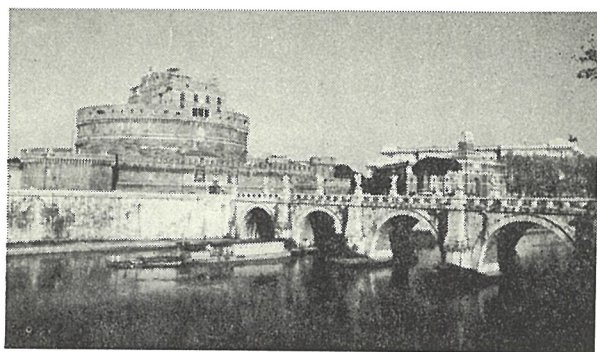
な子供をもつ母親は相変らず毅然として子供を叱りつけていたし、彼等を美術館に引率してくる先生は、使命観をもって情熱的に生き生きと説明していた。そして子供達は、互に「しいっ!」と牽制し合いながら静けさを保っていたのである。これにひきかえ、ホテルの食堂でいつも甲高い声で喋っているのは日本の子供連れの家族であった。子供は「何故」を連発し、母親は吾子の知的関心の強いのを誇らしげに一々答えている。美術館でも同様である。日本の子供は「これは何」「何が描いてあるの」と甲高い声で質問し、母親はあたり構わず答える。しかしその子は、何が描かれているかがわかると、せかせかと次の絵に移ってゆくのである。それは、一人でぼおとした表情で夢みるように味わう西洋の子供と全く対照的であった。何が描かれているか、描写対象の認識だけでは芸術鑑賞は進まない。感性で受けとめ、じっくりと味わう所に心は養われ、想像力が羽ばたき、やがて自分なりの問題意識も育つてこよう。しかし旅の途上で見る日本の子供達は、今日本を被う知育偏重の弊害をまざまざと見

せていたのである。

ヨーロッパは至る所に教会があり、その教会を中心に町は広がっていた。私はキリスト教の信者ではなかったが、大海を一人ボートで漕ぎ出したような境涯では、教会はいつの間にか一つの心の拠り所となっていた。美術史家にとってはその建築様式こそが最大の関心事であろうが、私にとってそれは、神秘的なステンドグラスの光りに囲まれた祈りの場であり、休息の場所であり、地図を拡げて位置を確かめる所であり、また、時には秘かに空腹を満たす場所でもあった。もしかしたら教会は、その昔旅人にそのように親しまれていたのではなかったろうか。私はこうして幾十の壮麗な教会を訪ね、弥撒に遭遇するとそれを見守り、オルガン演奏会があると聞き惚れた。私はヨーロッパ文化の根幹にあるキリスト教の聖堂を通じて少しづつ異国の文化に馴染んでいったのかもしれない。そうして一年近くかけて眺めたヨーロッパの文化は実に多様、多彩であった。国境を接する国々は各々に共通性を持ち乍ら、特有の風土と歴史的要因によって異った文化を形成して

いた。建築も彫刻も絵画も、ハプスブルグ家の栄光を負って今猶寶石のようにきらめいていたのはウィーンであったが、なだらかな緑の丘陵を気楽に旅した思いのするのイタリアである。そしてそのイタリアも、壮麗なゴシックの聖堂と歌劇の殿堂スカラ座をもつミラノ、ビザンティン芸術の宝庫であるヴェネツィア、そして、イタリア盛期ルネサンスの諸傑作によって今猶芸術愛好家を堪能させるフィレンツェ、古代ローマの遺構と迫害された初期キリスト教の遺跡を蔵して深く人生を考えさせるローマ等等、この余りにも偉大な文化を継承しながら、イタリア人はいとも気楽に、樂しげに暮しているのであった。スペインのマドリッドで見たゴヤ、ベラスケス、或はバルセロナのガウディ、ピカソ等の異色の芸術の誕生の背景には、赤土の続く荒涼たる自然があったが、グラナダからコルドバへと旅して、メスキター回教寺院の中に強引にはめこまれたキリスト教の礼拝堂を見たとき、凄まじいまでの宗教の争い、文化の混合、そのせめぎあいの中から、これらスペインの芸術が生れたことを理解したの

である。それは単一民族で、殆ど他民族に蹂躪されたことのない日本の文化と余りにも異質なものであった。また西ベルリン、ダレムに林立する多くの美術館群は壮観であるが、その中の民族学博物館にある奔放な原始仮面を見ていると、その隣りのキリスト教彫刻館に見る諸像が如何にも哀し



ローマ、テヴェレ河畔サンタンジェロ城。歌劇「トスカ」の第三幕の舞台、美姫トスカはここから身を投げる。

げに見える。ひょっとすると、人類は宗教を創ることによって、その創造力に鑑をはめてしまったのではなからうか。世界の多くの民族博物館をみた中で、ベルリンのこの博物館ほど奔放な原始の生命力を感じさせるものはない。ドイツ人のロマン主義と合理主義が然らしめたのであろうか。仮面に埋まるようにして置かれた実物大の丸木船は、雄大で今にも海洋に乗り出しそうに見える。訪れた高校生は目を輝やかして触先に立つのである。ギリシャ、エジプトの諸芸術は殆ど先進国に持ち去られ、本国で見るべきものは少い。しかし西洋文化の根底を作ったギリシャ文化が、アテネの歴史博物館で見るとき、余りにも東方的要素の強いのに驚ろいた。ナイル河の水がきれた途端に砂漠に変るエジプトの風土の苛烈さ、その中でも牛も羊もひどく痩せていたのが強く心にのこった。そのモスクから流れるイスラム教の祈りの声は、トルコのそれと同様に、どこか哀調があり、日本人の私の心に深く沁み透るものがある。さてこのように、十ヵ月余をかけて私はヨーロッパの国々で、心身ともにじぐざぐ

運動を繰返したのであるが、多くの人々との出会いを通じて、人間はみんな一つだという思いを新にした。と同時にその一つの人間が異った風土と歴史を負うとき、かくも多彩な文化を形成するのであった。

日本もまたその一つである。残念ながら日本の文化はまだヨーロッパに充分理解されてはいない。一つには日本人自身の外部への働きかけが足りないこともあるが、本質的にこれら西洋文化と異った文化を形成しているからと思われる。その異質性の根拠は何か。それを今後は世界に開かれた言葉と論理で究めなければならぬと思う。昨今である。

(大学文学部教授)



## 表紙の言葉

### 啓明館

同志社の建物といえば、重要文化財に指定されたクラーク館や礼拝堂等の煉瓦建築物が思い浮かぶ。しかし、大学と女子大の狭間に位置するせいか、目立たない煉瓦建築物がある。足を止め見上げてみると、実に美しい姿をしていた。

阪田 清 (大学職員)